

● 四 国

岸 啓 子

高松国際ピアノコンクールは第4回を迎え、古海行子が今回初めて日本人優勝者となった(第2位カンテ・キム(韓国)第3位伏木唯(日本))。審査のための委嘱作品「うんぽこどんぽこ」(小出稚子作曲)は讃岐のうどん打ちと屋島の狸伝説から着想され、うどん打ちと狸の身体的なリズムがやがて時空越境的に広がり変質してゆく作品で、この曲の演奏賞も古海行子が受賞した。瀬戸フィル(指揮:大友直人)は本選オケと入賞者コンサートで第1回からこのコンクールを支えている。運営側はHPにうどん打ちビデオまで1年前に公開するという念の入れようで(For the performance of "un poco don poco"), 期間中ユーチューブの配信もあり、アーカイブスでは演奏のユーチューブ視聴が今も可能である。ただ、本選チケットは完売で購入を諦めた人もいた反面会場に空席が一定数みられたのは残念であった。優勝者副賞として古海は瀬戸フィル第29回定期演奏会へ出演、本選と同じラフマニノフの「パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43」を演奏し聴衆を魅了した。

四国唯一のプロオーケストラ瀬戸フィルは例年通り変幻自在の編成で音楽ホール、美術館、カフェそして街かどに出現、地元密着の音楽活動を展開した。70名弱の団員による140回に及ぶコンサート(2017年資料)は大変な稼働率である。高松交響楽団「第119回定期「邦人作曲家名曲選～アニメ・映画から純音楽まで～」は宮川泰、久石譲、芥川也寸志、冬木透、伊福部昭「シンフォニア・タブカーラ」等楽団初のオール日本人プロを組み、選曲の妙と指揮者曾我大介との熱演により大好評であった。第120回定期(指揮:田中一嘉)では高松国際ピアノコンクール2位受賞者カンテ・キムがピアノ協奏曲「皇帝」のソリストを務めた。徳島交響楽団第47回定期は台風による延期にもめげず盛会のうちに終了。曾我は今年高松・徳島の2つの交響楽団を指揮、徳島交響楽団とは初協演となった(ピアノ独奏:長富彩)。愛媛交響楽団第45回定期(指揮:森口真司 チェロ:ナサニエル・ローゼン)はドヴォルザーク・プロを第46回定期(指揮:大浦智弘 ピアノ:花岡まり子)はグリーグとチャイコフスキーを演奏した。高知交響楽団(160回指揮:石毛保彦、第161回指揮:萩原勇一)は東欧・北欧とロシアのロマン派音楽に取り組んだ。萩原勇一は昨年アメリカ音楽で団員の支持を集め今回の再登場となった。四国フィルは愛媛県東温市国際音楽祭公演が悪天候のため中止、八幡浜公演のみとなった。

オペラ関連では四国四県の地元団体が全幕上演に毎年意欲を燃やした時代もあったが、最近ハイレイト上演やアリアガラ・演奏会形式の公演も増え、持続可能な発展へと舵をきった感がある。四国二期会高知支部は《セビリアの理髪師》《フィガロの結婚》をハイレイト上演、オペラえひめは《カヴァレリア・ルスティカーナ》を演奏会形式(指揮:加藤 完二)により演奏、四国二期会高松・徳島支部はそれぞれガラコンサートを開催した。高松市民オペラちえちりあは「あの時、あの瞬間、あの想い出を」で30周年を記念し、「日本を代表するオペラ歌手による祝賀演奏会～アート県かがわ出身の名歌手たち～」は香川芸術祭60周年記念のハイレイトとなった(林康子、多田羅迪夫、

小濱妙美、若井健司ほか 指揮:菊池彦典 高松交響楽団)。香川は「うどん県」として有名であるが、近年「アート県」としての認知度向上にも務めている。

たかまつ国際古楽祭inサンポート(2年目)は「旅する古楽」を主題に意気軒昂、コレギウム・ムジク高松第22回演奏会(指揮:大山 晃 チェンバロ:石川 陽子ほか)も健在である。高知バッハ・カンタータフェライン(第21回)はバッハのコーヒー・カンタータとモテット第1番を(指揮:バス:小原浄二ほか)、松山バッハ合唱団第48回定期「バッハ 珠玉のカンタータ集」はカンタータ22・23番等を取り上げ好演した(指揮:橋本眞行 Org.:大澤宣晃 S:藤井 冴 A:山下裕賀 T:田中雅史 B:黒田祐貴)。